

フィールド風

(現場)からの風

宮田守男

長野冬季五輪組織委員会事務総長を務めた長野市出身の小林實さんが6月に亡くな

輪の関係者約270人。開催から約20年、既に他界した関係者の情報も多い。本場に苦勞して成し遂げた五輪で関係した仲間との再会、お互いフルネームで話し合う関係は、互いの人生で五輪が占める部分が多いのだと改めて気付く。

冒頭、会場で信越放送が制作したメモリアル映像で懐かしさが込み上げる。阿部知事から「自治省時代頼りになる上司で優れた指導者」との内容や、元長野市長塚田佐さんから「同級生で初代総長の辞任を受けて激務の5年」だったことの紹介、特に「自分からは話を

することは控え、昔気質」の内容に当時を思い出す。

小林さんは、自治事務次官を務めた。自治省(現総務省)の事務方のトップ。2020年の

あり組織委員会は赤字で解散することができた。そして、長野オリンピックの準備段階で、一番話題を沸かせた。最後まで決まらなかった男子滑降スタート地点問題だ。

できる八方尾根(スタート地点1680m)と変更となったが、国際スキー連盟は、最高の競技会場としてスタート地点を1800m以上に引き上げるよう強く要請してきた。同

長野冬季オリンピックの財産について語り合ってみませんか

東京オリンピック等で運営事業費問題が大きな課題で長野冬季オリンピック等開催でも同様だった。だが国と

長野オリンピックは招致段階から、「自然に優しい、自然と共存」を掲げて競技会場の選定を行っていた。当初

地点は、国立公園第一種特別地域であり、問題を複雑化させた。小林総長は、オリンピックを数か月後に控え、

決着が付かない状況にあり、理念と理想の戦いで激務は想像を超えるものだったと記憶



感謝の会の祭壇、祭壇を賑やかに飾る品々から総長の生き方が伝わってくる

している。最終的に国内機関の協議により1765mとなり、内容的に自然保護を重視した内容で決着。現在の八方尾根の自然保護の高まりにもなった。総長になら

なければ、穏やかな人生が送れたらうと改め感謝の言葉を語りかけたのぶ会でもあった。(NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上)